責任性の年代[1]（1）

ウィリアム・L．ヘンドリックス

緒言（しょげん）と用語の定義

「責任性の年代（age of accountability）」という用語は聖書にある表現ではない。聖書の中で〔説明責任としての〕[2]責任性（accountability（アカウンタビリティ））という考え方[3]を表わす これに最も近い関連箇所は、おそらく ローマの信徒への手紙 14章12節と言えよう。「それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて 神に申し述べることになるのです」とある箇所である。ここで留意すべき重要な点は、この節で「申し述べること」とあるその部分に用いられている聖書の元々の言葉が "*logos*（ろゴス）" だということである。ヨハネ福音書の1章1節で 神の言（ことば）たるイエスを言い表わすのに使われているのと同じ、あの言葉である。そこでは すなわち、神が御自身について人間に提示された その説明もしくは表現としてのイエスを意味している。

「責任性の年代」とは、バプテストをはじめ 他のクリスチャンも一部そのように用いてきたように、人が神に応答するに充分なほどにこれを意識する人生のある時点、あるいはある時期のことを言う。この応答には、避けがたいこととして、誰もが例外なく神を拒むという 人間の側における特質がある（ローマ 3：23）。そして、それと知って神を拒絶する人は、神との関係が疎外されたものとなる。そこで生じるのが、罪の意識と限りある存在としての自覚である。こうしたなか、「責任性の年代」という問題がバプテストにとってことさら重要になるのは、次のような理由による。（1）バプテストは、教会の一員となる前に回心が必要なことを強調する。（2）バプテストはかつて、幾つかのケースにおいて、子どもに責任性が生ずるとする年齢を意図的に定めたことがある。そして、（3）バプテストは今日（こんにち）、「子ども伝道」によってもたらされたジレンマ（板挟み）に直面している。

「責任性の年代とはいつなのか？」との問いに関しては、他の関連する諸問題について検討するまで、これに答えることはできない。これらの諸問題とは、以下のようなものである。誰もが例外なく神に対して責任があるとは、いかなる意味においてか？ 集団と個人について、聖書の教えるところはどうか？ 時代を経るなか、聖書の時以降、いかなる変化が生じてきたか？ 子どもが宗教的にいかなる存在か、聖書は具体的にどう教えているか？ 神を信じると言うとき、そこで最低限必要とされることは何か？ さらには、我々バプテストが今日（こんにち）行なっている子ども伝道の実施情況についても調査し、その評価を注意深く行なわなければならない。これらをめぐる考察がこの章[4]の大部分を構成することになる。そして終わりに、子どもたちの扱いと「責任性の年代」の想定について、指針と提言を記すことにする。

誰もが例外なく 神に対して責任があるとは、いかなる意味においてか？

子どもたちは〔架空の生きものでなく〕現実の存在である。〔紛いもない〕人間である。C. S. ルイス（C. S. Lewis）がその傑作シリーズ『ナルニア国物語（*The Chronicles of Narnia*）』で、一人の子どもに向かって、白い魔女にこう尋ねさせている。「おまえは人間かい？」 答えはもちろん、イエスである。かくして、子どもも人間の一員であるとしたら、その彼らはいかなる意味で責任ある存在とされるのだろうか。事はまずもって、より大枠の問いに答えることから始めねばなるまい。すなわち、誰もが例外なく神に対して責任があるとは いかなる理由においてか、という問いにである。

創世記の 1 章 26〔～27〕節を見ると、人は神のかたち（the image of God）に創造された〔口語訳〕[5] と述べられている。そして、キリスト教史上、この「神のかたち」をめぐり、それがどのようなことを意味しているのか、多種多様な見解が示されてきた。神のかたちとは、筆者が考えるには、人が神に応答しうることを意味していると言えよう。この応答には、神を受け入れる場合もあれば、これを拒む場合もありうる。人が神に応答しうるのは、神が御自身を現わし示しておられる啓示という事実によっている。そして、人が神を受け入れる仕方でこれに応答するとき、神御自身がその各人を等しく助けてそうさせてくださるのである。

人間に対する神の啓示が何より明確に見て取れるのは、イエス・キリストにおいてである。啓示はイエス・キリストにおいて 我々の世界に来る。我々が今触れているこの世界は、神がそれを創造されたときより劣った様相で存在している。我々はこれを称し、「堕罪（the fall）」と呼んでいる。高慢、反抗、欲望といった罪が、特有の性質として、すべての人に認められる。高慢として 罪がその姿を現わすのは、一義的には、人が神を神として受け入れるのを拒むことにおいてである。高慢のゆえに、人はもっぱら 自らのなせるところにより頼むようになる。そして、すべてのことを自分自身の考えで判断するようになる。一方、反抗はといえば、最終的に御自身に忠実であることを求められる 神のその求めを拒否することにおいて明らかになる。それは単に決まりや規定を破るといった以上のことである。すなわち、人間としての本質そのものが本来そうあるべきそのあり様に反するようになるのである。そして、欲望としての罪は、すべての事柄を利己的な目的で自らのもとに引き寄せることに その特色がある。

これらの次元において、罪は人間存在の構造全体に影響を及ぼす。人は自らを引き上げ、究極的なものとする。高慢である。人はまた、神がその人生に最終的に求められる正当な求めに抵抗する。反抗である。そして、人生における関係を自分本位の目的でつくろうとすることで、人はいつも それを歪めてしまう。すなわち、欲望である。このように、神の啓示が来るのは理想のそれ以下となってしまった世界にであり、罪によってひずんでしまった人々のもとになのだ。

こうしたなか、この神の啓示が最も明確な形をとったのがキリストであるいじょう、人はそのキリストに向き合うとき、全き責任を有する者となる。つまり、応答しうるというその事を実際に行なうとき、そこに責任性というものが生じるからである。そして、それがゆえに、人がキリストと相対するとき、これと進んで繋がるか あるいはこれと繋がることを故意に拒むか、その行為がもっぱら

本人のあり方を決定づけることになる。言い換えれば、もっぱら 本人の責任性が問題となるのである。ヨハネによる福音書はこれを言葉にして述べ、人は「御子（みこ）」を信じるか信じないかにより、神に受け入れられもし、また拒否されもすると語っている（ヨハネ 16：8〜11[6]）。さらには、イエスは「道であり、真理であり、命である」とも言われている（同 14：6）。したがって、キリスト教の信仰を何より明瞭に言い表わすなら、人はイエス・キリストの求めに向き合うことで神と相対（あいたい）すると言えよう。この対面において、完全なる責任性ということに至るのである。

しかしまた、このように明言するとき、そこに即 避けがたい諸問題が伴うことにもなる。〔すなわち、次のような問いである。〕人はただキリストにおいてのみ、神を知るのか？ 福音を告げ知らされ、そこでキリストに向き合うということが一度もない人々については どうなのか？ 子どもたちはいつ、キリストと向き合うのか？

人はただキリストにおいてのみ、神を知るのか？

（続く）

訳 注

1. 原文の英語表記は "The Age of Accountability" で、今風な表現で直訳すれば「説明責任の年代」とでもなろうか。"accountability（アカウンタビリティ）" とはそもそも "accountable（アカウンタブル）" という語から来た言葉（名詞形）で、"accountable" の意味合いについては、OED（*Oxford English Dictionary*）が "liable to be called to account, or to answer for responsibilities and conduct" "responsible" と、また OAD（*Oxford American Dictionary*）も "required or expected to justify actions or decisions" "responsible" と、その解説を記している。つまり、自（みずか）らの責務や行為、決断について しかるべき説明をなし、それを妥当なものとして弁明することが求められ、期待されているということ。それが "accountable" の基本的意味合いであり、"accountability" はこれを名詞化したものとなる。

本訳稿では、こうした含意を押さえつつ、と同時に 表現を分かりやすくするため、タイトルを「責任性の年代」と訳出することにしたい。

2.〔 〕書きは、説明追加のための訳者の挿入。以下、同様。

3. 上記「訳注 1」を参照。

4. 本小論は Clifford Ingle, ed., *Children and Conversion*, Broadman Press, 1970 に、その第 6 章として所収されている。

5. 新共同訳では、「神にかたどって・・・」。

6.「3：16〜18」の誤植か？

（矢野 眞実訳）